

# 1000年後の女川へ

# 夢壊させぬ教訓

東日本大震災の津波の記憶を後世に伝えようと、宮城県女川町の女川中卒業生が建立する「女川のいのちの石碑」の最後の21基目が完成し、21日に町内の現地で除幕式があった。2013年11月の1基目設置から丸8年で整備を終えた。同級生らが集い、災害から未来の命を守る決意を新たに示した。

いのちの石碑は震災直後の11年4月に入学した生徒が計画した。「地震が来たらこの碑より上へ逃げて」と避難を促す言葉を碑に刻み、町内各浜の津波到達地点より高い場所に建ててきた。

21基目は昨年夏に開校した女川小中学校の校舎脇に設置。碑文は1基目と同じ「夢だけは壊せなかった 大震災」を選んだ。

## 「いのちの石碑」全21基完成

だ。

全ての碑には災害への備えとして「非常時に助け合うため普段からの絆を強くする」「高台にまちを作り、避難路を整備する」「震災の記録を後世に残す」との文字が刻まれている。

除幕式には同級生でつくる「女川1000年後のいのちを守る会」のメンバーや保護者ら約30人が出席した。阿部由季会長(23)が「私たちのようにつらく悲しい経験をするのではないよう活動してきた。震災を後世に語るきっかけになってほしい」と語った。

守る会はメンバーが中学2年だった13年2月、建立費に充てる募金を開始。約半年間で約1000万円を集めた。現在は社会人や大学生になった約10人が

中心となり、各石碑の前で語り部活動を続ける。

メンバーの鈴木智博さん(22)

は「残りの999年、人々が自分の命を守るように防災の輪を広げていきたい」と力を込めた。



女川小中学校脇に完成した21基目の石碑と、守る会のメンバー